映画「痛くない死に方」3月公開

在宅医療のあり方問う

開業医・長尾和宏さん原作　高橋伴明さん監督

2500人を看取った尼崎市の開業医・長尾和宏さん(62)原作の映画「痛くない死に方」と、長尾さんの日常を追ったドキュメンタリー映画「けったいな町医者」が、今月下旬から大阪で相次いで公開されます。長尾医師と、「痛くない死に方」の監督・脚本を務めた高橋伴明さんがキャンペーンで来阪し、作品への思いなどを語りました。

長尾医師は、1958年、香川県出身。高校卒業後、ダイハツ工業の生産ラインで働き、84年に東京医科大学を卒業。大阪大学医学部附属病院、芦屋市立病院の勤務医を経て、1995年1月の阪神・淡路大震災の後、尼崎市内に長尾クリニックを開院しました。その間に看取った患者の数は勤務医時代1千人、開業後1500人。新型コロナウイルス感染拡大で医療機関が逼迫する中、「最後のとりで」としてコロナ患者の治療に奮闘する姿も注目されています。

在宅医と患者・家族を描く

「痛くない死に方」は、ピンク映画や社会派作品で知られる高橋伴明さんが、長尾医師著のベストセラー「痛い在宅医」「痛くない死に方」(ブックマン社)を原作に脚本を書き、メガホンを取った、在宅医と患者、家族の物語。第22回上海国際映画特別招待されました。

在宅医療に従事する田仁(柄本佑)は、末期肺がん患者井上敏(元史朗)を担当し、娘の智美(坂井真紀)と父の様態の急変など談を受けるも電話対応で終始。敏夫は苦しみ抜いて死んでしまいます。

在宅医の先輩・長尾(奥田瑛二)から、下のカルテではなく本人を見て、肺がんより時河を疑い処置すべきだと指摘され、悔恨の念にさいなまれる河田。のちに長野の在宅医療の立ち会い、在宅医のあるべき姿を模索する中、同じく末期の肺がんである本多彰(宇崎浩彰)を担当することになります…。

「理想の死」を描きたかった

「この作品は、死に方の提案。自分にとって理想の死を描いた」と高橋監督は言います。

父親を49歳で亡くした高橋監督は、65歳になった時から「自分は延命処置をせず、自然な経過に任せる「平穏死」でした。

患者の自殺にショック受け

長尾医師は、1995年に開業するまで大病院に勤務していました。

胃がんの終末期の患者から、抗がん剤治療をやめて自宅に帰りたいと言われますが、できないと返事しました。その患者はその日の夜、飛び降り自殺しました。これにショックを受けたことと、大震災で価値観が変わったことが相まって、幼い頃に住んでいた尼崎市で開業しました。

開業後、初めて在宅で看取ったのは、診療所になった場所の大家さん。肝臓がんの末期患者でした。やがて腹水がたまり黄疸が出て来院できなくなりました。往診を続けた長尾医師。大家さんは約2カ月後、「枯れる」ように亡くなっていきました。

以来、勤務医時代からの豊富な臨床経験や教訓も生かしながら、患者の最期まで寄り添い、約1500人を看取ってきました。

映画では8割の撮影に立ち会い、終末期の患者の容態などアドバイスしたことで、臨場感のある映像になりました。

「生きることは食べること」など、患者が自らの力で食べることや、日々、生きがいや楽しみを感じながら過ごすことの重要性など、長尾医師が語り続けてきた言葉が、作品の随所にちりばめられています。人間の死という重くなりがちなテーマが、ユーモラスなせりふ、監督自作の川柳、故人の人生を愛しむような野辺送りのシーンなどで温かく描かれます。

「これまでの作品は、この登場人物、このせりふが自分にとって敵であるとか、勝手に自分の中で敵をつくって対決姿勢をエネルギーにしてきましたが、いつの間にかそういうものが抜けていった。この作品は、一番力が入っていないと思う」と高橋監督。

長尾医師は、製薬マネーなどで医者が患者を薬漬けにする構造なども批判した上で、こう語ります。

「そういうものを全部ぶち壊したいし、目覚めてほしい。この映画は不都合な、やっかいな映画かもしれませんが、一般市民に観ていただいて共感を得て、その輪が広がってほしい。政治と一緒で、医療を変えるのも市民です」

◇

両作品の上映日程は次の通り。

「痛くない死に方」

3月5日(金)から、なんばパークスシネマ050・6864・7125、テアトル梅田06・6359・1080、MOVIX堺050・6864・7093。

「けったいな町医者」

2月26日(金)から、なんばパークスシネマ、MOVIX堺、3月20日(土・休)から、第七藝術劇場06・6302・2073。

映画「痛くない死に方」の監督・脚本の高橋伴明さん(右)と原作の長尾和宏医師＝4日、大阪市浪速区内

映画「痛くない死に方」より
©「痛くない死に方」製作委員会

ドキュメンタリー映画「けったいな町医者」

ドキュメンタリー映画「けったいな町医者」より　©「けったいな町医者」製作委員会

ドキュメンタリー映画「けったいな町医者」は、「痛くない死に方」の助監督を務めた毛利安孝さんが監督。2カ月間、長尾さんに密着し、震災をきっかけに大病院の専門医から町医者になった経過や思い、「医療とは往診である」をモットーに、患者や家族に最期まで寄り添う姿や、笑いの絶えない外来診療の様子などを描きます。ナレーションは俳優の柄本佑さん。